

豊田利幸先生のこと

熊 本 一 規

(明治学院大学国際学部教員)

豊田利幸先生と親しくさせていただくようになったのは、いつの頃からか、定かな記憶はない。おそらく先生が明治学院大学を退職されて以後のことである。

契機は定かでないものの、私は、いつのまにか、先生の遊泳仲間になっていた。先生からのお誘いを受けて、目白駅近くにあるホテルのプールで水泳を楽しむようになったのである。そのうえ、時折は、荻村伊智朗直伝の腕を持たれる奥様とも卓球を楽しんだ。

先生のクロールは、年齢別五輪ならば金メダルを取れるのでは、と思われるほど、しなやかで速かった。背中の中分以上が水面から出るほど身体が浮いていて、滑るように泳がれた。横泳ぎ（のし）も見事であった。

水泳を楽しんだ後には、レストランで食事をしながら先生のお話を聞く機会を持つことができた。身に余るほどの贅沢な時間であった。

周知のように、先生は、素粒子論を専門とされる高名な物理学者であった。

しかし、先生の偉大さは、優秀な物理学者であるとともに、「科学者の社会的責任」を問い続け、反核運動に取り組み続けられている点にあったと思う。パグウオッシュ会議をはじめとする反核運動における先生のご活躍ぶりは広く知られるところであるが、私には、故宇都宮徳馬議員主宰の『軍縮問題資料』に毎号のように巻頭論文を発表

されていたことが特に印象に残っている。私は、宇都宮議員が会長を務められていた山村振興調査会に身を置いたことがある関係で、時折、宇都宮事務所を訪ねていたが、その度に先生への感謝の念を伝えられたからである。

実は、先生は、反原発運動にも理解を示されていた。反原発運動においても先生の存在は大きく、運動に取り組む人たちの心の拠り所となっていた。国会の場で反原発で活躍された故吉田正雄議員も、宇都宮議員同様、先生を最も頼りにされ、感謝されていた。

反原発の理由について、先生は、よく「放射能は生物と共存できない、この一点でいいんだ」と言われていた。放射性廃棄物を出すことが避けられず、また原子炉自体が巨大な廃棄物になる原発は、放射能を出すことだけで否定されるべき、ということである。それは同時に、反核運動に取り組まれる先生の原点でもあったに違いない。

「学は一つなり」（学問は人間のためであり、学者がそれぞれの専門に自己閉塞することは許されない）を信条とされる先生は、私の取り組んでいる問題にも関心を寄せられた。特に、先生の出身地で起こっている徳山ダム問題には強い関心を持たれていた。

石垣島白保の新空港問題では、当時の大田昌秀沖縄県知事を紹介してくださり、おかげで、大田知事にお会いして、白保のオバア（石垣の言葉で

「婦人」の意味) たちの持つ権利について説明する機会を持つことができた(その後、沖縄県は新空港の予定地を白保からカラ岳に変更した)。豊田先生と大田知事と私のみが知る秘話である。

ガリレオを敬愛されていた先生は「そこに漲る旺盛な批判精神はいかなる権威をも恐れなかったため、当時の教会権力およびそれに追随する『学者』たちの反感と憎しみを買うことになった。…ガリレオの弟子たちがモットーにした言葉『プロヴァンド・エ・リプロヴァンド』は、普通に訳せば『試みること、そしてもう一度試みること』

となるが、…『危険を冒してあえて試みる』から『決闘する』という意味にも使われることがあるという」と記されている(『物理学とは何か』18-21頁)。反核運動への取り組みに示されるように、先生は、いかなる権威をも恐れぬガリレオの批判精神に学び、自らの人生の場で、「決闘する」ほどの決意で、それを見事に貫かれたのである。

先生の丁寧なコーチにもかかわらずクロールの上達しなかった不肖の弟子ではあるが、先生の貫かれた批判精神を少しでも我が物としていきたい、そして、そのことを通じて先生の学恩に報いていきたいと念じている。